

カーリーナと



クリスマス劇

まいとし がつ 毎年 12 月になると、エベリン先生の クラスは
クリスマス劇を します。カーリーナにとっては、学校に
にゅうがく はじ 入学してから 初めての クリスマスです。今日は、
せんせい こども げき せつめい エベリン先生が 子供たちに 劇についての 説明をし、
だれが どの やく 役を やるかを おし 教えてくださいます。カーリーナは
ま き 待ち切れません。

げき 劇は、タミーという ちい 小さな てんし 天使が クリスマスの
にん む ちじょう 任務で 地上に やってくるという お話でした。
せんせい やく エベリン先生は カーリーナに、タミーの 役を やりたいかと
たずねました。「これは、とっても たいせつ やく 大切な 役なの。
セリフを ちゃんと おぼ 覚えなくちゃ いけないのよ。」と、
せんせい せつめい エベリン先生が 説明しました。





カーリーナは、タミーを ^{えん}演じられるなんて すごい、
と ^{おも}思いました。でも カーリーナは、人前に ^{ひとまえ}立つと
はずかしくなって、言うことを ^いわすれてしまったり
するのです。学校の劇では、学校中の ^{がっこう}子供たちの
^{りょうしん}両親が ^み見に来ます！ カーリーナは今朝、ずっと
そのことを ^{かんが}考えていました。

「エベリン先生、わたし、天使の役をやることは
できないと ^{おも}思います。」学校が ^{がっこう}終わるころ、カーリーナは
^{せんせい}先生に ^い言いました。「セリフを ^{ぜんぶ}全部 わすれて、劇を
めちゃくちゃに しちゃうかもしれないもの。」

エベリン先生は、カーリーナに やさしく ^い言いました。
「だいじょうぶよ、セリフを ^{おぼ}覚えるのを ^{てつだ}手伝って
あげるから。自信が ^{じしん}持てるまで、十分 ^{じゅうぶん}練習 ^{れんしゅう}するの。
きっと、すばらしい ^{げき}劇が できるわ！」

それを聞いて、カーリーナは安心して、家に
帰ると、パパとママに、学校でやる劇のことを
話しました。

毎日、カーリーナのクラスは劇の練習をしました。
けっこう大変な仕事です。自分のセリフも
覚えなくてはならないし、歌もしっかり歌えないと
いけません。カーリーナは、小さな天使タミーの役が
できることを喜んでいました。お母さんは、
ピカピカ光るスパンコールの付いたきれいな
天使の衣装を作ってくれました。つばさや光輪も
あります。





クリスマス劇^{げき}をする 前日^{ぜんじつ}の ことです。

エベリン先生^{せんせい}は 子供^{こども}たちを、実際に 劇^{げき}を 演^{えん}じる
会^{かい}場^{じょう}に 連^つれて行^いって、舞^ぶ台^{たい}げいこを させました。
大^{おお}きな 舞^ぶ台^{たい}は 明^{あか}るい 照^{しょう}明^{めい}で 照^てらされ、いすが
何^{なん}列^{れつ}も 何^{なん}列^{れつ}も 並^{なら}んでいました。子^こ供^{ども}たちは
み^いん^{しょう}な、そ^きれ^{れん}ぞ^{しゅう}れの 衣^い装^{しょう}を 着^はて、練^{れん}習^{しゅう}を 始^はめる
用^{よう}意^いが でき^いていました。

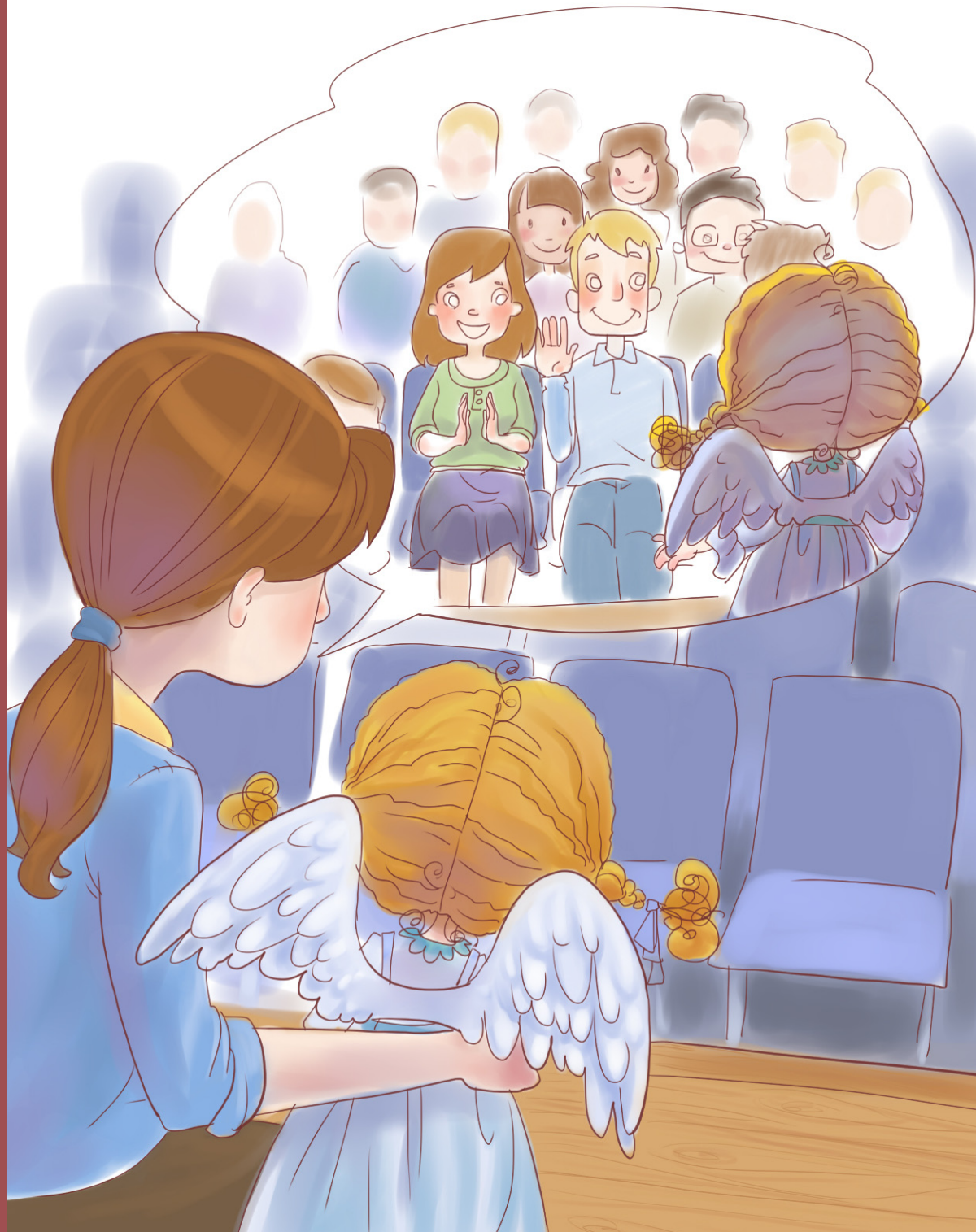
カリーナは 自^じ分^{ぶん}の セリフや 歌^{うた}を 一^{いつ}生^{しょう}けんめい
覚^{おぼ}えましたが、舞^ぶ台^{たい}に 立^たつと きんちょうしてきて、
自^じ分^{ぶん}の 番^{ばん}になると、セリフを 全^{ぜん}部^ぶわすれて
しま^いました。エベリン先生^{せんせい}は すぐに 出^でだしを
教^{おし}えてくれましたが、カリーナは セリフを
ぼそぼそと 言^いうのが やっ^いと^いでした。

エベリン先生は 舞台の カーテンの 向こう側から、
カーリーナに 心配しないようにと 声を かけました。

「ごめんなさい、先生。」 カリーナは 小さな 声で
言いました。「あんなに たくさんの いすが 並んでて、
そこに 人々が すわって 自分を 見るんだと 考えたら、
おなかの 調子が ヘンに なっちゃって。・・・それで、
セリフを 全部 わすれちゃったの。わたしには
無理だわ。」

エベリン先生は ほほえむと、自分も 小さな 時は
みんなの前で 演じるのが 大変だったのだと、
カーリーナに 話してくれました。けれども、
お母さんが ちょっとした コツを 教えて
くれたんだそうです。





「コツ？」 カリーナは たずねました。

「お客さん^{きやく}の中^{なか}に いる 母^{はは}と 父^{ちち}と 兄^{あに}を
み 見つけ、そっちを ずっと みて いるようにって、
はは 母^{おし}が 教えてくれたの。そして、うちの
リビングルームで 家族^{かぞく}だけに 向^むかって
えん 演じている ところを 想像^{そうぞう}するのよ。」

「それって、うまくいったの？」

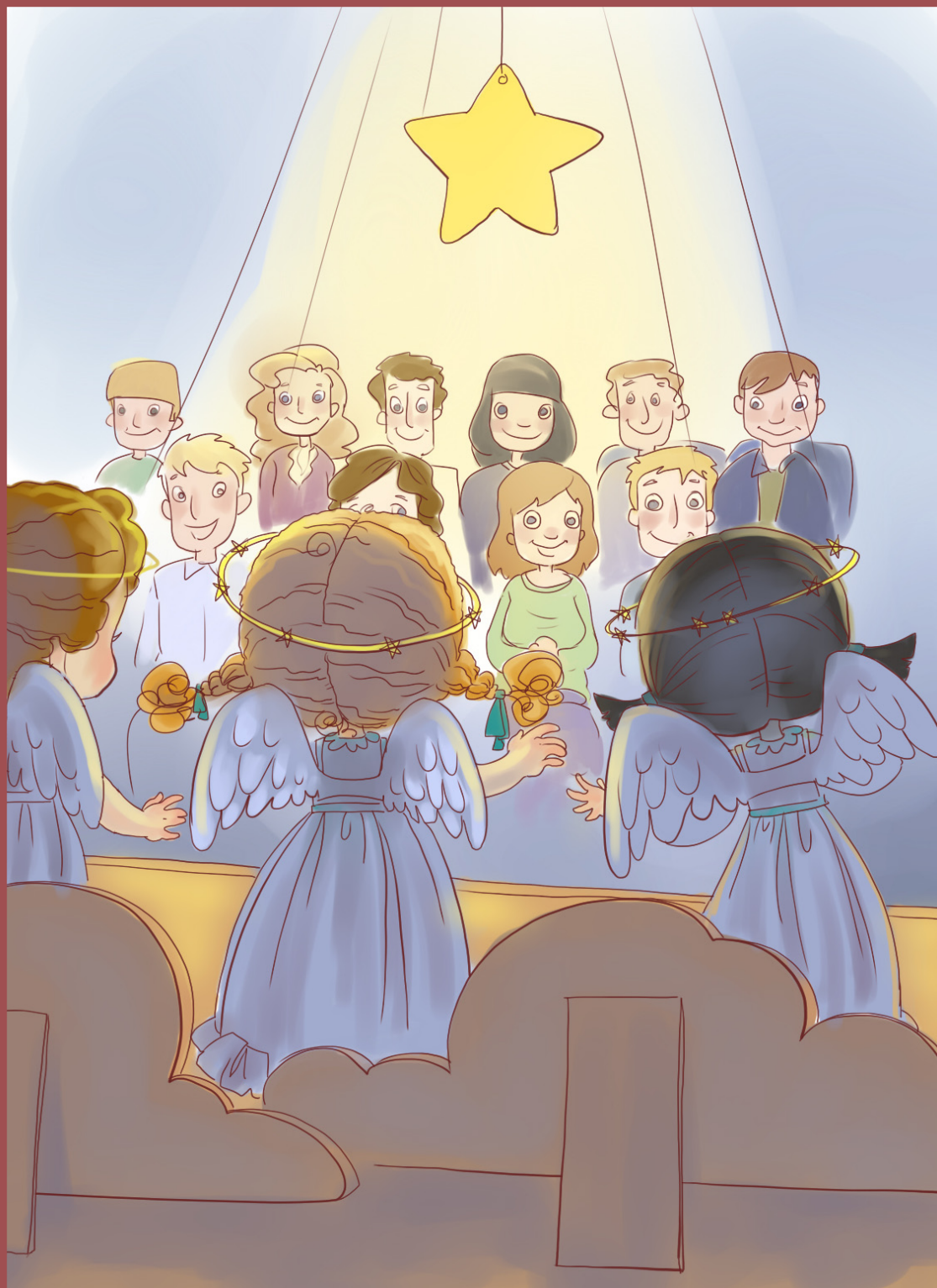
「ええ、毎^{まい}回^{かい}ね！」

「あなたも ^{ため}試してみたら いいわ。」と エベリン^{せんせい}先生が
言いました。「いくつかの いすを ^{えら}選んで、そこに
あなたの ^{かぞく}家族が すわっていると ^{そうぞう}想像するの。そして、
タミーの ^{にんむ}任務を ^{かぞく}家族に ^{ぜんぶ}全部 ^{はな}話すのよ。」

カーリーナは、ぜひ やってみたいと ^{おも}思いました。
^{さいしょ}最初は ちょっと ^{かん}はずかしく ^{かん}感じていましたが、
^{ぶたい}舞台げいこは あっという間に ^ま終わっ^おてしまいました。

^{ぶたい}舞台から ^で出ていく カーリーナに、
「すばらしかったわ！」と エベリン^{せんせい}先生が ^{かんせい}歓声を
あげました。「明日^{あす}その コツを ^{おぼ}覚えてい^おれば、
きっと ^{さいこう}最高の ^{でき}出来に ^{なる}わ。」





ついに、学校で 劇を ひろうする 日が やって
きました。カーリーナは 自分の 役を するために
舞台に 上がりました。大勢の 人を見ると、
また おなかの 調子が ヘンに なってきました。
その時、エベリン先生が 教えてくれたことを
思い出しました。

カーリーナは お客さんの 中に、パパと ママと
2人の 姉妹が すわって いるのを 見つけました。
お母さんは ほほえんで 手を ふってくれました。
それで 自信が わいて きました。すぐに、
カーリーナは おなかの 調子が ヘンだったことも
すっかり わすれて しまいました。覚えていたのは、
自分の 家族に 伝えたかった タミーの すばらしい
お話だけでした。

げき かんせい と しゅ まく と
劇は、歓声と はく手かっさいで 幕を 閉じました。

カーリーナは、自分の セリフも うた
覚えていました。

「ちゃんとできるって、わかってたわよ！」

エベリン先生は カーリーナに ハグを しながら、
こわだか い いま み てん し
声高に 言いました。「今まで 見た 天使の タミーの
なか さいこう
中で、最高の タミーだったわ！」

ぜんぜん
「全然 きんちょうしなかったわ。」と カーリーナは
い
言いました。「それに、すごく 楽しかったわ！」

文：カチューシャ・ジュスティ

絵：サビーン・リッチ デザイン：ステファン・ミーラー

Copyright © 2010 年、ファミリーインターナショナル

"Carina & the Christmas Play" -- Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/>

